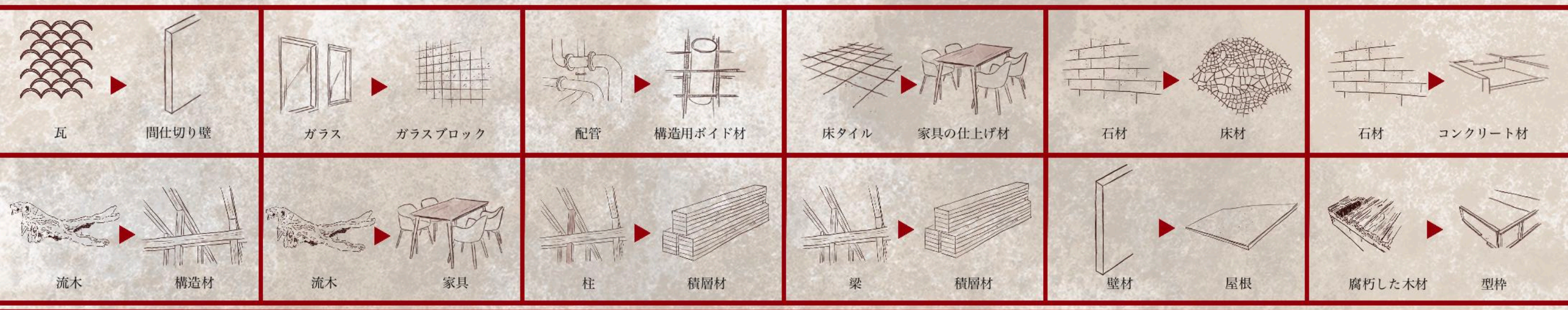
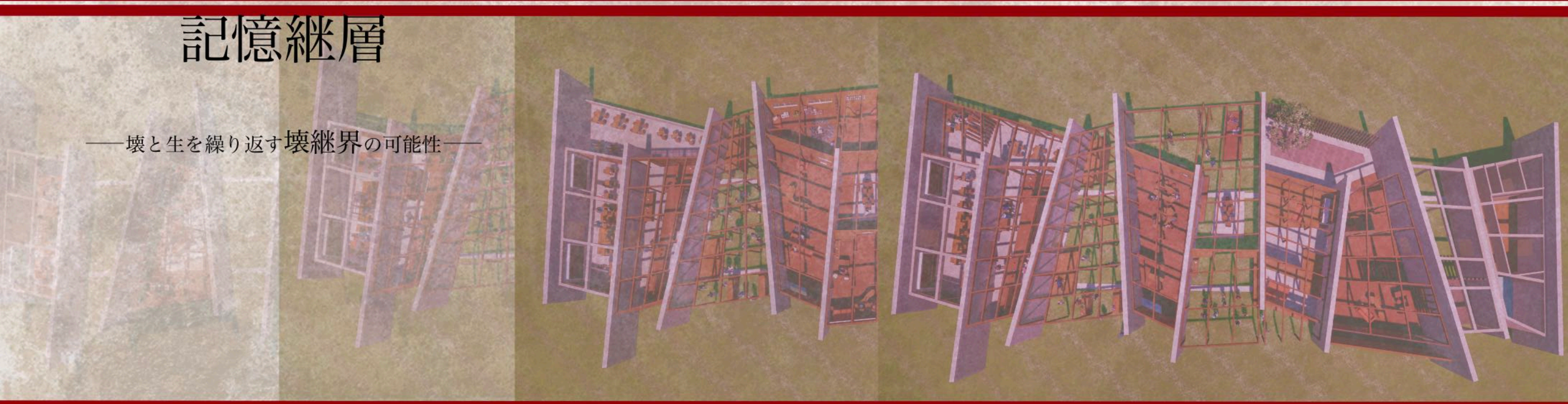
~魂の宿る素材　12のマテリアル~



記憶継層

――壊と生を繰り返す壊継界の可能性――



~コンセプト~

天災によって壊れゆくモノには、かつての営みの記憶と想いが宿り、形を失っても「魂の宿る素材」として存在し続ける。日本の風土では、壊れることは終わりではなく、新たな秩序や価値を生む契機とされ、そこに独自の「和の美」が生まれてきた。壊れては再生し、また壊れる・・・その循環の中で成長と変化を育む空間を「壊継界」（かいけいかい）と名付け、時間を超えた存在の可能性を示す。
日本固有の「勿体無い精神」は、失われゆくものの中に価値を見出し、活かし続ける知恵を育んできた。
また、「八百万の神」の思想は、すべてのものに命が宿るとし、壊れることさえも新たな巡りの一環と捉える。
この精神を受け継ぎ、「壊継界」は単なる再構築ではなく、時間・空間・記憶が交差する場となる。

~壊継界とは~

壊継界とは、壊れたものに宿る記憶や想いが、新たな形で再生・継承される空間であり、「崩壊と再生・終わりと始まりが交わる創造の場」である。日本には、あらゆるものに神が宿るとする「八百万の神」の思想があり、壊れることもまた新たな命の循環の一部と捉えられる。壊れること自体が価値を生み出す過程となり、そこに「和の美」が息づく。

~壊継界による様々な可能性~

価値観の変化

壊れたもの＝無価値という固定観念が崩れ、[壊れること]が
再生や創造の起点として認識されるようになる。
これにより、美や価値を見出す基準が広がり、
不完全なものへの定的なまなざしが生まれる。

物質の循環

壊れた素材や構造が廃棄されず、新たな形として
再利用されることで、持続可能な物質の循環が生まれる。
破壊と再生を前提とした、柔軟でしなやかなものづくりが促進される。

記憶と物語の継承

壊れたものに宿る記憶や想いが、新たな形で表現されることで、
個人や地域の歴史、物語が未来へ継承される。
物理的な継続性を超えた「魂の継承」が可能となる。

空間や風景の変容

崩壊と再生を繰り返す中で、空間や風景が静的なものではなく、
流動的で生きた存在として再認識される。
壊継界は、常に変化し続ける「生きた場」を生み出す起点となる。